

# Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.26 No.1 January 2025

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



1

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
お墓地に続く道  
／井上 昭洋 ..... 1
- ・ 天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」  
(15)  
ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相④  
／加藤 匡人 ..... 2
- ・ 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌 (23)  
戦後の台湾社会の変化と伝道庁復興  
／山西 弘朗 ..... 3
- ・ ライシテと天理教のフランス布教 (38)  
21世紀のライシテと天理教のフランス布教⑧  
／藤原 理人 ..... 4
- ・ イスラームから見た世界 (32)  
世界神学とは②——つしか知らない者は、一つも知らない——  
／澤井 真 ..... 5
- ・ 日本占領期の香港—植民地研究の視点から— (新連載)  
はじめに  
／山本 和行 ..... 6
- ・ 2024年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ (10)  
第4講：36「定めた心」  
／八木 三郎 ..... 7
- ・ おやさと研究所ニュース ..... 8  
第372回研究報告会 (11月7日) / 2024年度宗教研究会兼伝道研究会を開催 (11月8日) / 連載執筆のねらいと執筆者紹介 / 2024年度公開教学講座のご案内

## 巻頭言

### お墓地に続く道

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

私が天理小学校の2、3年生の頃、昭和40年代のことだが、月次祭の度ごとにお墓(天理教豊田山墓地)に向かう道の両脇には沢山の屋台が並んでいた。大祭の時などは、西境内の辺りから北大路の交差点を越え、豊田山に続く道を当時の養徳院の前を過ぎる辺りまでびっしりと軒を並べていたと思う。祭典日の数日前から店が並びだし、祭典日の翌日もまだぼつりぼつりと店が残っていたような気がする。幼い頃のことなので、記憶のねつ造という可能性もあるが、そのように記憶している。小学校の下校時は、現在の西境内地の駐輪場横の道を通り、2名の傷痍軍人を脇目にL字に折れる道を左に曲がり、その先を右に折れてお墓地に続く家路を歩いた。

乾物屋、お茶屋、反物屋、瀬戸物屋、金物屋、履き物屋などがあつたと思う。子供の目を引く食べ物では、回転焼き、天津甘栗、綿菓子、リンゴ飴の店があつたが、たこ焼きや焼きそばを売っている店の記憶はない。お面、スーパーボール、巻き取り笛など、種々の玩具を売る店もあつた。ただ、おもちゃの場合、その年に流行した一点物を売る店があり、アメリカンクラッカー、スピログラフ定規などのおもちゃはその場で実演販売していて、ランドセルを背負ったまましげしげとそれを眺めていた。私が欲しかったのは、ゴム動力で羽根がパタパタと動いて飛ぶ黄緑色の鳥のおもちゃである。子供の目にも華奢な造りの玩具だったので、どうせこれはすぐに壊れると言いつつ聞かせ物欲を抑えていた記憶がある。日用品の一点物の実演販売では、包丁研ぎ器や針糸通し器があつたが、これもまた子供の目にもちゃちな作りのものだった。

お墓地への参拝者でござつた返す道を彼らの間を縫い、色々な店を見ながら下校したのだが、なかでも私の興味を引いたのは古い本の類いを話術で売る商売人だ。お墓地へ続く道、川をまたぐ交差路の右手(東側)の電柱の前

に三脚を立て、絵の描かれた白布を垂らして滔々と話をし、最後に本を売るのである。私の記憶のなかでは、柳の下の幽霊、背を向けて去って行く人たちに追いつがる男性、墓石などのおどろおどろしい絵があつたように思う。細身の中年男性の「妊婦が墓参りをして墓石に水をかけますと、よからぬ事が起こるのでございますう〜」という口上に何か恐ろしいことが起こるのだと震え上がり、家に帰って母親に尋ねた記憶がある。母の説明を聞き終えると、ランドセルを置いて再び出陣。彼の話が2巡目に入っても聞き続け、最後には「小僧、あっちに行け」と追い払われた。

先日、その話を母にすると、大声で喋る「大口お婆さん」と呼ばれる女性の古い本売りがいたという。辻立ちしていた場所は、私の記憶と異なり、養徳院の角の交差点とのこと。彼女についての記憶は私には全くないが、私の知る男性商売人の先輩だったのかもしれない。いずれにせよ、とにかく祭典終了後のお墓地への参拝者の数は多かつたのである。人々の間を縫って下校したというのは記憶のねつ造ではない。教祖80年祭から90年祭に向かう教勢があつた時期だったので、帰参者が多かつたということもあるが、祭典終了後、お墓地参りをするのが彼らのルーティンだったのであろう。あれだけ多くの人全てがお墓地にお墓を持っていたとは思えない。彼らがお参りするのには教祖の墓地であつたはずだ。

その頃のお墓地へ続く道の混み具合を考えると、当時の帰参者のマインドマップの中では参り所として教祖の墓地が占める割合はかなり大きかつたのではないか。もちろん、現在でも祭典終了後にお墓地を参拝する人はいるが、帰参者全体のなかで占める割合は当時と比べれば少ないだろう。そして、彼らの多くは、豊田山舎や自分の家のお墓に参るのが主たる目的ではなからうか。現在、教祖の墓地参りをするためだけに豊田山への道を登っていく人はどれくらいいるのだろうかと思う。